

【研究ノート】

## 近現代の他界観研究の動向と課題

佐 崎 愛

**要 旨：** 本論では日本人の現代の他界観、すなわちあの世のイメージとはいったいどのようなものかという博士課程前期（修士課程相当）の課題を考察するにあたり、まずは先行研究史上において他界観がどのように扱われてきたのか、その課題と動向を探ることを目的とする。内容としては、まず近現代における先の研究者たちの他界観研究における視点、研究手法を確認した後、それらから見える近現代の他界観研究上の課題を追った。具体的には、最初に「他界観」という言葉の定義について確認した後、日本の他界観研究史を確認した。この際他界観を研究テーマとしていた研究者は膨大であるため、大まかな研究史を追った後、特に重要と思われる研究者、特にいまでも強い影響力を持つ柳田国男と折口信夫を中心に、彼らの論ずる他界観について取り扱った。さらに、日本の他界研究においてよく見られる四つの他界（山中他界、海上他界、天上他界、地下他界）を四方に設定・図示し、それぞれ詳しく内容を見るとともにこれまでどのような議論がなされてきたのかを分析、考察した。その結果、研究手法はフィールド・ワークと民話・説話・歴史史料などの文献を用い、その焦点は他界観がどのようなものから発生したのかという原型を求める点にあった。しかし、観念において原型を求めるという点には限界があるため、むしろこれまであまり扱われていなかった通時的他界観の変化を考察することが今後の課題といえる。

**キーワード：** 近現代、山中他界、海上他界、天上他界、地下他界

### 1. はじめに

近現代の日本人<sup>1</sup>の現代の他界観、すなわちあの世のイメージとは、いったいどのようなものか。これが私の博士課程前期（修士課程相当）において、関心を持っているテーマの大枠である。そこで「他界観」とはどのようなものであるのかについて、まずその定義から考察する。『日本民俗大辞典』の「他界観」という項目では、以下の通りに定義されている（鈴木 2000:28-29）。

人間の死後に靈魂が行く世界や神靈の住まいする世界についての観念。現世に対する他界で、あの世や異界ともいう。死後の他界は靈魂が肉体から分離して他界で存続するという霊肉二元観を基礎にしている。

また、『日本民俗宗教辞典』（松本 1998:367-369）では理想郷として「他界」という言葉を用いている。以上の辞書レベルの意味から考察すると、他界とは、「死後の世界」、「異界」もしくは「理想郷」というのがその定義に当たるようである。異界の問題については、小松和彦、理想郷の問題については宮田登が詳細に研究を行っているが、このうち筆者は死に対するイメージがどのようなものであるかを探ることを目的とするため、主に他界観を「死後世界についての観念」という意味として用いることとする。

私が他界観に関心を持ったのは、まず卒業論文で『古事記』の神代の話を用い、『古事記』中にみられる日本人の他界観について考察したことが理由として挙げられる。古代日本の他界観がどのようなものと考えられているのかについて、歴史研究また日本思想史研究に

おいていまだ影響力のある家永三郎<sup>2</sup>の主張する「否定の論理の発達」<sup>3</sup>を手がかりに考察を行った。また他界観に関心を抱く理由として、つぎに、現代におけるテレビやアニメ、小説、映画などサブカルチャーにおける他界のモチーフや他界的要素の氾濫、またその人気が挙げられる<sup>4</sup>。興味深いのは、このように宗教的な要素が身近にあふれているにも関わらず、日本人は自身の特性として、もしくは日本人全体を「無宗教」だと見做しているという結果が、様々な統計的なデータとして提出されている点である<sup>5</sup>。しかしこの「無宗教である」という意識に反して、現代、宗教やそれに準ずる宗教的な要素は依然なくなっておらず、むしろ1990年代後半以降のスピリチュアル・ブームから、かえって存在感を増している。上記のようなサブカルチャーの現状から、これらを主導する若い世代にも「宗教的」な要素は支持されていると見てよいだろう。しかしこのような現象は、いったいなぜ起こるのか、その原因を考察する上で、近現代までに他界研究では①どのようなテーマが設定され(問題関心)、②どのように先行研究でまとめられて(研究手法)きたのだろうか。つまり現代の日本人の宗教観を知るための一助として、日本人の他界観がどのように変遷していったのかを考察する必要がある。

今回は上記のような理由と問題意識を出発点として他界観を考察することで、近現代における先の研究者たちの研究における視点、研究手法といったものの動向を追い、課題を解明するための一助としたい。

なお、今回他界観の研究動向を追うにあたり、タイトルにもあるように、時代の幅を近現代(明治～現代)と設定する。また他界観を研究テーマとしていた研究者は膨大であるため、大まかな研究史を追った後、他界観研究においていまだ影響力を持つ、民俗学上特に重要と思われる研究者2名とその他界観について取り扱うこととする。

## 2. 他界観研究の大まかな流れ

そもそも日本の他界観研究は、主に本居宣長や平田篤胤以来の国学に端を発する。近現代における他界観研究は、まずこれらの流れを引き継ぎ「新国学」を標榜する柳田國男と、その高弟の折口信夫から始まったと言っても過言ではない。また柳田以降は、その流れを引き継ぐ弟子たちによって柳田の説を裏付けるような事例が数多く発見される。

以下では、柳田以降の研究者たちがどのような課題意識を持って他界観研究に打ち込んだかについて大まかにその流れを追った。また特に他界観研究を主眼に置くような研究者のみ取り上げることとした。加えて着目する他界観は以下の4種類(山中他界、海上他界、天上他界、地下他界)を設定した。これは『日本宗教学事典』の「他界の方向と場所」の項目(赤田 1994:634-636)において設定された四界であり、日本の民俗的他界観としてしばしば設定されることの多い他界観である。また、今回このような4種の他界観を扱うにあたり、他界観それ自体が多様であり、また他の信仰と複雑に絡み合っている点を踏まえた上で、今回はその中でも民俗学研究上で多く言及される4種の他界観に絞り、その他を除外している。さらに、本論中では民俗学上その基盤を作り、また他界観研究にも多大な影響力を持つ研究者、柳田國男と折口信夫について特に詳しく取り扱うことをここで断わっておく。

まず、他界観研究の起点である柳田國男について述べる必要がある。柳田は日本人固有の信仰というものがどのようなものであるかを研究テーマの中心に据えて研究を行うこと

で、山中他界という概念を生み出した。これは柳田の言う祖霊信仰と密接に関わるものであるが、それについては2で述べることにする。また柳田の三女の娘婿である堀一郎は、柳田の思想を受け継ぎ、『万葉集』における挽歌の研究を行った（堀 1953）。そこで彼は挽歌における単語の分析を行い、古代日本人の中に山中他界が根付いていることを明確にした。これを発展させたのが伊藤幹治であり、伊藤は堀の挽歌による研究を受け、さらにこれに葬送の方法と社会階層を踏まえて古代の日本人の他界観について分析した（伊藤 1957:23-32）。また伊藤幹治は当時、他界観がどのように論じられているのかについて、特に常世の観念を柳田と折口を比較しつつ論じている（伊藤 1980:102-121）。

また柳田は「海神宮考」（1950）「海上の道」（1952）「根の国の話」（1955）において、根の国と常世の関係の同一性を指摘し、また東方浄土の観念について論じた。さらに柳田の高弟である折口信夫は「民族史観における他界観念」（1952）において、その字義などから常世の国を発展段階論的にとらえている。折口は他界研究のテーマを最初、他界における生物がどのような考えから出現したかという問題意識として設定していたが、その根底にはなぜ人間はこの世と対になる他界を想像し始めたのかという疑問があったとしている。なお、どちらも琉球を研究対象としている。

また棚瀬襄爾は『他界観念の原始形態』（1996）で、進化論に対抗して生まれた文化史学によりつつ、「未開社会」の他界観念の歴史を探ることを目的として分析を行っている。著作の中で棚瀬は国外の宗教学者（またはその先駆けと言われる研究者）の扱う他界観の問題点を考察し、その後オーストラリアやニューギニア等の東南アジアにおける他界観について論じており、宗教学から他界観について考察を行う上で非常に参考になる。また、五来重は教学・思想史に偏りがちだった日本仏教研究に民俗学の視点を取り入れ、綿密なフィールド・ワークから各地の他界観を含めた庶民信仰を研究した。久野昭は、日本人の他界観を精神的な問題として見直すことを目的とし、葬送儀礼などから他界観が生まれた理由についての考察を行っている。久野の著作『日本人の他界観』（1997）では、「闇の中の死穢」（地下他界）、「亀の上の山」（海上他界）、「白雲たなびく彼方」（山中他界）、「後生二元論」（輪廻転生）の4つの他界観の分析・分類を行っている。

また、直接的に他界観を考察するものではないが、どうしても切り離し得ない問題について取り扱っている研究者も少しばかりだが取り上げる。まず、他界観を考察する上で、靈魂観は切り離すことのできない問題である。それは、多くの場合あの世に向かう際に靈魂が肉体を離れ、靈魂のみがあの世に行くと考えられているからである。古代の靈魂観の研究においては、桜井徳太郎が『靈魂観の系譜 歴史民族学の視点』（1977）で靈魂観を論じているが、これは他界を考察する上で考慮すべき研究であると言える。また、他の思想・宗教と日本の他界観・死生観の変化・混合については、神仙思想の側面からは下出積與、また仏教の側面からは冒頭でも触れた家永三郎、また山折哲雄の研究が大いに参考になる。

さらに近年の動きとして、これまでの研究成果を概観しつつ改めて日本文化における死の扱いを探るため、佐藤弘夫はその主著『死者のゆくえ』（2008）において他界と現代の関係が日本人の信仰面でどのように通時的に変化してきたのかをわかりやすく図示して述べており、これは他界観研究において信仰上の観念の在り方を考える上で大いに参考になる。また老いや病氣、死など予想外の出来事や喪失体験において人間の心はどのように働くのかをテーマとし、やまだようこらは心理学の方面から現代の他界観を論じるため、学生に

あの世がどうなっているのかを想像し図示させるアンケート調査を行っている。

以下の章では、他界観を一般的に知られる4つの分類、即ち山中他界、海上他界、天上他界、地下他界に区分し、それぞれ概念の説明と先行研究について取り上げることにする。またこの4つの分類を考察する上で、より分かりやすくするため、またそれぞれの場を相対的に考察するため、垂直他界と水平他界という概念から考察を行う。なお、今回は上記の4種の他界の位置、すなわち4種の他界がどこにあるのか、という場所的問題（より正確に言えば方向の問題）に限定して検討するため、四方を設定している。そのため2において、死後「傍にいる」ものや「この世以外にある世界」「墓地に死者が宿る」などの場合は今回除外している。

### 3. 垂直他界と水平他界

信仰上の他界観を垂直と水平という二つの表象で論じたのはおそらく本居宣長『記伝』十二之巻にある指摘からと考えられる。また折口は琉球の研究を行った際に、他界「ニライカナイ」を水平、また神々の神界である「オボツカグラ」を垂直の他界と論じた。ここから、水平他界は人間の生活する地上から見て水平方向に存在する海上他界や山中他界、またはるかかなたの地上に設定している他界観と説明できる。また、垂直他界とは、天上他界や地下他界のように上下方向に設定された他界観と説明することができる。

四分類に関しての方向観は、下記の簡略な図を参照されたい。これまでの垂直他界と水平他界の図においては、山中他界を垂直他界の分類に持って来るものが多かった。しかし筆者は、山中他界を水平他界に持って来ることによって、天上他界について、四分類上で扱うことが可能となると考えた。

また、下記以降で語られる他界観に関しては、実に様々な解釈が試みられている。松村武雄『日本神話の研究』（1958）によると、たとえば栗田寛や中田薫は、根の国を出雲国に比定し、辻春緒は海中の世界、次田潤や渡部義通などは地中の世界と想定している。また溝口駒造のように、根の国を一種の仙界と解釈する人もいる。しかし、以下では学問史上、最初に山中他界、海上他界を指摘した柳田國男と海上他界についてより革新的な意見を示した折口信夫の説を中心に取り上げている。

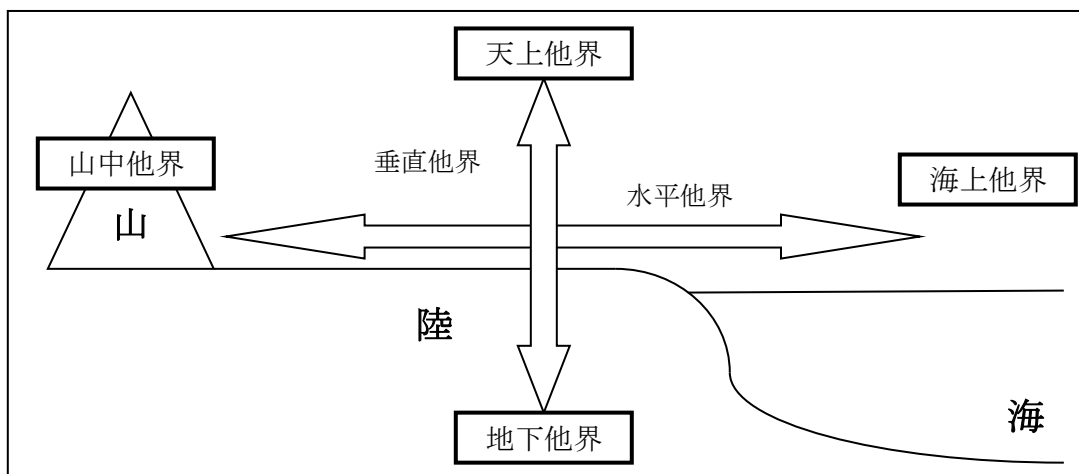


図1 水平他界と垂直他界

#### 4. 山中他界

『日本民俗大辞典』の「他界観」の項目（鈴木 2000:28-29）では、以下の通り述べられている。

ミタマ（死霊）は近くの山に登り子孫を見守り続け、正月や盆には家を訪れ、春秋の彼岸には供養を受けるなど、他界と現世は連続的で頻繁に交流すると信じられた。年忌供養を経て死霊は次第に個性を失い三十三回忌で弔い上げをしてカミ（祖霊）になる。…（中略）…平安時代以降は仏教の浄土教と習合して、山中に地獄や極楽浄土があるとされた。十～十一世紀に山中への納骨や納髪が始まり、骨とタマが山岳を介して結び付く。

具体的な例としては、青森県の恐山や高野納骨で有名な高野山、山形県の立石寺、香川県弥谷寺、月山、日金山、立山、朝熊山、妙法寺などが名高い。ここでは、特に柳田國男「先祖の話」（1981）における山中他界について、その詳細を検討する。山中他界について、柳田は「帰る山」において以下のように語っている（柳田 1945:123-124）。

無難に一生を経過した人々の行き処は、是よりもつと静かで清らかで、此世の常のざわめきから遠ざかり、且つ具体的にあのあたりと、大よそ望み見られるやうな場所でなければならぬ。少なくとも曾ては其様に期待せられて居た形跡はなほ存する。村の周囲の或る秀でた峰の頂きから、盆には盆路を苜り払ひ、又は山川の流れの岸に魂を迎へ、又は川上の山から盆花を採つて来るなどの風習が、弘く各地の山村に今も行はれて居るなども其一つである。霊山の崇拜は、日本では仏教の渡来よりも古い。仏教は寧ろこの固有の信仰を、宣傳の上に利用したかと思はれる。

（下線は引用者による）

このことから、柳田は日本における固有の信仰においては、死者の霊は天国や地獄などといった観念的な世界、遠くの世界に行くのではなく、子孫を見守れるような近くの山へ行くとしている。そして弔いあげられると山の神となり、しかし夏になると田の神として降りてくると言う様な信仰の在り方を示した。これに関係し、霊山信仰などもこの山中他界の観念によるものとされる。つまり、後に入って来た仏教における極楽や地獄が山中他界、平安期以降の阿弥陀信仰や浄土観念の流行と結び付くとするのである。そのため祖霊の宿る山をあの世とし、山の中に極楽や地獄があるという山岳信仰へと結び付くとする考え方である。

#### 5. 海上他界

『日本民俗大辞典』の「他界観」の項目では「中世の熊野修験は海上に観音の浄土を想定し補陀落渡海で到達を目指した」という例が挙げられている（鈴木 2000）。また『日本民俗宗教辞典』の「他界観」の項目では、海上他界の代表として沖縄の事例が以下の通り挙げられている（松本 1998:28）。

神話や伝説の中では、たとえば彦火火出見尊が訪問し豊玉姫と結ばれた海神の宮

や浦島子が訪れた竜宮など海中他界の観念を表すものと、…（中略）…沖縄ではるか海上かなたに神、死霊、稲、火など万物の発生の原郷ニライカナイがあるとする考え方が伝えられている。日本本土でも他界の二つのイメージ、つまり理想郷のイメージと死後の世界のイメージの両者ともに多様である。

記紀における常世の国もこれにあてはまると言えるだろう。なお、記紀の例によって海上他界ではなく海中他界とされることも多い。ここでは、柳田國男「海神宮考」（1950）「海上の道」（1952）「根の国の話」（1955）と折口信夫「民族史観における他界観念」（1952）における常世の観念に関してその詳細を検討していきたい。柳田はいずれでも琉球研究を手掛かりに日本文化の出自・系譜を探ろうとしていた。ここで柳田は日琉同祖論という視点から、日本神話における根の国＝琉球の「ニライカナイ」という論を展開した。一方の折口もまた琉球研究から、八重山の島々に出現する季節的来訪者が、祖霊から妖怪、最後に海のあなたの楽土の神へと発展したと考えた。そしてこの理論を海上他界である常世の国にも応用し、常世の国も常夜から常齢（永久の齢を表す）、最後に常愛（不死にして愛の溢れた楽土）という発展段階をとげるとした。

また、柳田國男と折口信夫は沖縄の他界の方角についても論じており、柳田は「海上の道」において日本は日の登る方角に常世を考えたとする東方浄土を提唱し、沖縄の人々が本来他界を東方に想像していたと考えていた。一方折口は「常世浪」（折口 1956:294）において、北や東、まれに西（いずれも大和もしくは朝鮮）の方から神や stranger が来るとし、琉球の他界の方位は東方に固定したものとは考えなかった。

## 6. 天上他界

『日本民俗宗教辞典』の「他界観」の項目では、「天の羽衣や浦島子が開けた玉匣の中から天空に飛翔して去った神女などが天上他界の観念を表す」（松本 1998:367）と述べられている。現代日本において死後世界としての天上世界は設定されることは少ない。それは堀（1953）や統計調査などからも明らかである。しかし現代、死後「星になった」という表現が出現し始め、このような表現もまた天上世界への表現ともとることができる。だがこのような新しく現代に出現した語の体系的な研究はほとんどなされていないため、以下では一般的に天上世界として見做される記紀における高天原の例について見ることにする。

最初に「天上他界」が記述される記紀においては、神々の住まう高天原が設定される。高天原は神々の国であり、一見死後の世界としての他界観に含めがたいが、『日本書紀』における天稚彦にまつわるエピソードでは、天稚彦の死を知った父親の天国玉は息子の亡骸を天上に持ってこさせ、喪屋を建てて殯を行ったという記述があることを、大東俊一（2009）は指摘している。

また、棚瀬襄爾は『他界観念の基本形態』（1996）において、天上他界について、伸展葬を行う民族であり、かつ至上神を祭る民族が天に存在する神々の世界を設定する傾向があると東南アジアにおける例を示しながら述べている。また、この天上他界に関して特に進化論的な立場が優位な時代における考察を以下の通り行っている（棚瀬 1996:696）。

これら天界の特色は、それが至上神の御許であるという点である。神観念の起源

論上において、アニミズム的起源論が批判され、至上神観念の最も未開な民族における厳存、ならびに至上神の唯一独在を主張する原始一神教が A. ラング、P.W. シュミットなどによって唱導せられ、その実証性のゆえに高い評価を受けたことについては既に筆者は幾度か研究発表も試みまし、紹介も試みた。

言い換えると棚瀬は、進化論が盛んだった時代において宗教も進化論的な立場をたどると考えられていた当時を以下のように考察している。当時の A. ラングをはじめとした研究者たちは、この天上世界の観念こそ進化の最後に辿り着く一神教の始まりの概念、すなわち原始一神教であるとし、当時の社会から高い評価を受けた概念であったという。このような進化論的見方は、今ではほぼ否定されている考え方ではあるが、他界観がどのように考察されてきたのか、またどのように日本において受け入れられているのかを考察する際の一助となる。

## 7. 地下他界

地下他界に関しては、文字通り地下の世界に他界が広がっているという考え方である。日本の記紀において、死者たちの国として「黄泉の国」「根の国」「妣の国」が設定されているが、これもまた一般的に地下他界と見なされている。またその際、洞窟や井戸などが地上と地下とを繋ぐ他界間相互の接点とされる。しかし、記紀における地下他界に関してはその所在や根の国と黄泉の国の同一性の是非など多くの点でいまだに論争が続いており、そもそも黄泉の国や根の国、妣の国が地下の世界と一概に断定はできないというのが現状である。例えば柳田の根の国＝常世論もこの一つに含められるだろう。

一般的に黄泉の国や根の国が地下他界として取り扱われる理由としては、主に記紀におけるイザナミの記述によるものと思われる。イザナミが死後に行き、またイザナギがイザナミを求めて向かった黄泉の国における記述では、暗く、穢れており、また岩の戸が存在している。またイザナミをイザナギが見る場面においては、イザナミは蛆がたかり、雷を体中にまとった姿で現れる。これらの表現を、古代の葬制との類似から、イザナミの姿は地中に埋めた腐乱した遺体を示すとする見方もある。この考え方によると、大きな岩戸があること、黄泉の国まで降りるために存在する黄泉比良坂が古墳の入り口から石棺のある玄室までの道、羨道ともみなしている。

## 8. おわりに

まず、これまでの内容を踏まえてその動向を考察する。はじめに日本における他界観研究においては、基本的に日本古来の他界の原型ともいえるものがどのようなものであるか、またどのようなものに影響を受けたのかという問いを問題の中心に据えることが多かった。特に柳田の仏教伝来以前の日本の固有の信仰を探ろうとする姿勢などがまさにその代表である。また、「根の国」に関してなど、他界観に関してはいまだ多くの論争が続いている。しかし概念の源を探ることを目的とする場合、確かな正解が見出だし難い研究であるという点は改めて踏まえるべきである。

またその研究手法としては、一つは特定の地方における物語や民話、神話、短歌（その中でも挽歌）を読み解き、それを分類したり、他の伝説や言い伝えなどと比較検討したり

することで、他界観の原型を探ろうとするものがある。また、二つ目としては、その社会の主に墓、社会制度、そして特に葬制が他界観に影響を与えていると考え、比較して分析を加える手法である。これまでの研究者たちはこの二つのどちらかの手法を用いるか、また併用することにより研究を行っている。また特に柳田以降の研究者は、フィールド・ワーク型の資料収集を行う者が多く、その基点である柳田國男、折口信夫の他界観研究の学説は、いまでも大きな影響力を持っている。しかし影響力のある二人の師弟の説は、対立的に見ることのできる部分も多い。

以上のことからこれまでの研究動向を分析すると、I. 研究目的としては、①他界観念の原型は何か、②どのような他界観念であるのか、という2点に絞ることができる。その中でも歴史的事実とどこまで呼応するのか、また社会風俗と他界の関係などにも多く言及がなされている。また、II. 研究手法としては、①既存の民話や説話、歴史史料からの分析、②フィールド・ワークによる資料収集とその分析・分類、③①と②を組み合わせたもの、という3点に絞ることができる。研究手法に関しては、基本的には①を重視した③のパターンが一般的なようである。

次に、上記の傾向から課題を引き出し考察する必要がある。まず一つ目として、上記4つの他界観に分類して先行研究史を見ると、他界観の原型を探ることに問題関心が特化されており、現在筆者が関心を持っているような他界観のイメージの通時的変遷について触れられていない点において、今後言及の余地があると言える。また、古代・中世における他界観の研究は盛んに行われているが、近世・近代・現代における他界観に関する研究は比較的少ない。今後、私自身の課題として、この通時的な変遷と、特に現代における他界観を課題として考察を行っていきたい。

また二つ目として、他界観がどうして生まれたのか、という点において、心理学的視点からの意見があまり存在しなかった点である。つまり他界観やイメージというものが人間にとってどのような役割を果たしているのかという問題である。これは近年の脳科学の発展から国外の研究者(例えば、S. ガスリー(Steward E. Guthrie)やP. ボイヤー(Pascal Boyer)ら)によって神観念のレベルではいくつかの議論がなされているも、他界観についてこのような視点での考察がなされていないこともまた課題であるといえよう。

これらの先行研究史、また他界観研究における動向と課題を踏まえた上で、近現代における他界観がどのようなものであるかを今後のテーマと課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 「日本人」という用語に関して厳密に定義を行うべきであるが、今回はあえて特定の地域や場所に限定をかけず、大きな枠としての日本人を想定している。これは、日本人全体のあの世のイメージに影響を与えたものがあることを想定しているためである。なお、これは1950年代以降日本全国から集められた松谷みよ子『現代民話考』(1985-1996、立風書房)の考察を行った際、どの地域にも往々にして「お花畑」や「川」のイメージ(=他界観)が見られたことに起因する。これに関する詳細は別途論ずる予定である。

<sup>2</sup> 家永三郎(1913-2002):日本の歴史研究家(日本思想史)。代表著作の一つに『日本思想史に於ける否定の論理の発達』(1940、弘文堂)がある。

<sup>3</sup> 否定の論理:キリスト教に内在するような「~するために…してはいけない」(例「救われるためにはイエスは死なねばならぬ」)という論理であり、これは現実否定からもたらされる。今日の世界宗教と呼ばれる宗教に見られるもので日本には元はなかったが、仏教を通じてもたらされた。これ



により日本人にもともとあった肯定的人生観と連続的世界観が否定された、というものである。

<sup>4</sup> 例として、上橋菜穂子『精霊の守り人』（1996-2007、偕成社）（小説）や中村光『聖☆おにいさん』（2006-、講談社）（マンガ）などのように、宗教学や民俗学上における他界観が遍在する作品が他にも数多く挙げられる。

<sup>5</sup> これらのデータは統計数理学研究所をはじめとした多くのアンケート調査が行われており、また日本人の無宗教論についても阿満利麿（『日本人はなぜ無宗教なのか』1996、ちくま新書）をはじめとして研究がなされている。

## 引用文献

Boyer, Pascal

2002 *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought*, Basic Books, New York.

Guthrie, Stewart E.

1995 *Faces in the Clouds: A new Theory of Religion*, Oxford University Press, New York.

赤田光男

1994 「他界の方向と場所」『日本宗教事典』編集委員会（小野泰博、下出積與ほか）『縮刷版日本宗教事典』弘文堂、東京、634-636 頁。

阿満利麿

1996 『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、東京。

家永三郎

1940 『日本思想史に於ける否定の論理の発達』新泉社、東京。

伊藤幹治

1957 「古代の葬制と他界観の構造」『国学院雑誌』60(7):23-32.

伊藤幹治

1980 「他界観念」上田正昭[編]『講座日本の古代信仰』第1巻、学生社、東京、102-121 頁。

折口信夫

1920 「妣が国へ・常世へ 異郷意識の起伏」折口信夫全集刊行会[編]1995『折口信夫全集』中央公論社、東京、2:13-24.

1929 「古代生活の研究 常世の国」折口信夫全集刊行会[編]1995『折口信夫全集』中央公論社、東京、2:25-47.

1952 「民族史観における他界観念」折口博士記念古代研究所[編]1967『折口信夫全集』中央公論社、東京、16 巻。

1956 「常世浪」『折口信夫全集』中央公論社、東京、16 巻。

久野昭

1994 『共同研究 日本人の他界観』国際日本文化研究センター、京都。

1997 『歴史文化ライブラリー 日本人の他界観』吉川弘文館、東京。

五来重

1976 『仏教と民俗：仏教民俗学入門』角川書店、東京。

桜井徳太郎

1977 『靈魂観の系譜 歴史民族学の視点』筑摩書房、東京。

佐藤弘夫

2008 『死者のゆくえ』岩田書院、東京。

島菌進、葛西賢太、福嶋信吉、藤原聖子

2006 『宗教学キーワード』有斐閣双書、東京。

下出積與

1968 『神仙思想』吉川弘文館、東京。

鈴木正崇

2000 「他界観」福田アジオ、新谷尚紀、湯川洋司、神田より子、中込睦子、渡邊欣雄[編]『日本民俗大辞典』下、吉川弘文館、東京、28-29 頁。

大東俊一

2009 『日本人の他界観の構造』彩流社、東京。

棚瀬襄爾

- 1996 『他界観念の原始形態—オセアニアを中心として—』 中西印刷所、京都。  
西村亨[編]
- 1998 『折口信夫事典 増補版』 大修館書店、東京。
- 堀一郎
- 1953 「万葉集にあらはれた葬制と他界観、靈魂観について」 『万葉集大全』 平凡社、東京、8 卷。  
松村武雄
- 1958 『日本神話の研究』 第 4 卷、培風館、東京。
- 松本浩一
- 1998 「他界観」 佐々木宏幹、宮田登、山折哲雄[編] 『日本民俗宗教辞典』 東京堂出版、東京、  
367-369 頁。
- 柳田國男
- 1945 「先祖の話」 柳田國男 1998 『柳田國男全集』 筑摩書房、東京、15:3-150。  
1950 「海神宮考」 柳田國男 1963 『定本柳田國男集』 筑摩書房、東京、1:35-84。  
1952 「海上の道」 柳田國男 1963 『定本柳田國男集』 筑摩書房、東京、1:3-34。  
1955 「根の国の話」 柳田國男 1963 『定本柳田國男集』 筑摩書房、東京、1:85-109。
- 山折哲雄
- 1976 (改訂版 2011) 『日本人の靈魂観 鎮魂と禁欲の精神史』 河出書房新社、東京。
- やまだようこ、加藤義信
- 1996 「発達 2-1 「あの世」と「この世」の関係イメージ (1) :2つの世界の空間配置」 『日本教育  
心理学会総会発表論文集』 (38):13。  
1996 「発達 2-2 「あの世」と「この世」の関係イメージ (2) :2つの世界を分ける標識」 『日本教  
育心理学会総会発表論文集』 (38):14。  
1998 「イメージ画にみる他界の表象—この世とあの世の位置関係—」 『京都大学教育学部紀要』  
44,86-111。

(さざき・あい／東北大学大学院 文学研究科)